

PRO-LIFE

胎児を守る運動

2000年5月 No.115

中絶に反対する運動

愛は美しい

愛は美しいものだ。恐らく母親の愛は中でも一番美しく、疑いなく一番世の中に知れ渡っている愛だろう。これまでの歴史を通して、母親と子どもは驚く程の絆で結ばれていて、その絆は、女性が自分に赤ちゃんが出来たと気付いた瞬間から作られているものである。その絆が、妊娠一ヶ月目、四ヶ月目、又は八ヶ月目に入ってから断絶されてしまうというのは、なんとという悲劇だろうか。私達の社会がこの絆と愛を埋め去ってしまったのであり、代りに誇らしげに「自由と選択権」を掲げているのである。これらの二つの言葉、自由と選択権は、それぞれこの時代にとつても大切であるし、それは奨励されるべき価値のあるものである。問題なのは、これらの言葉がある関係を持って同時に合わせて使われた時、自分勝手心が狭くて冷酷な意味になってしまふことがある。この言葉が同時に合わさったことにより、三千五百二十七万二千人の命が奪われている。これらの命は生まれる前の何の罪もない子ども達の命で、自由と言ふ偽善の言葉によって奪われた。それはすべての自由そして最

も大切な権利、つまり生きる権利を否定された、三千五百万人の命なのである。

女性の子宮は、それまでのように神が意図された天国ではなくに、代りに死が自由に支配できる場となった。中絶が合法化され、女性は、一番守らなければならぬものを逆に破壊する手段と力を与えられた。発育途中の人間の子どもは組織のかたまりと考えられるようになり、そう呼ばれる所まで卑下されるようになった。人間の命の価値はここまで見くびられているのである。今女性達は、面倒くさくて負担になると思うものから「簡単に逃れられる道」を持っている。中絶はまるで、私達の時代の大きな前進の一步で、女性にとつてもとても良いことのように見える。しかし中絶は、言われているような安全な方法ではない。耐えなければならぬ肉体的痛み、他、女性は中絶の後に、強烈な悲しみと罪の意識を経験することもある。

中絶は単に生まれる前の子どもを奪うだけではない。それは同時にすべての女性にとつての未来の子どもの命を脅かし、すべての女性が母として得るべき幸せと

喜びを脅かすものなのである。その女性が母親になるチャンスは永遠に奪われてしまふかもしれない。中絶は私達の社会に貢献するものではない。中絶自身も又はそれを支持する人達も、女性が持つている本来の性質と感情を無視する様にと、働きかけているのだから。

女性は常に、やさしい性とされてきたし、そのように誉めたたえられてきた。ロマンスと愛に生き、思いやりと柔らかさで安心を与えてくれ、自分の分身をこの世に生み出す為に私心を持たず強さを持つている、と言われてきた。ところが、昔は自分のお腹にいる子どもを決して傷付けない様にと一生懸命守っていた女性達が、今は一生懸命自分の子を殺す為の権利を守るうとしていているなんて、なんて悲しいことではないか。

お腹の中の子どもは、命のない組織のかたまりではない。それが出産されるまでは子どもではないなどというのは、馬鹿げた説である。受精した瞬間で、

何千もの性質や特徴が決まってしまうのだから。その瞬間に、男の子になるか女の子になるか形作られている。彼らは潜在的なものではない。彼らは人間で、未来の妻や母親、未来の夫や父親なのである。これらの

命はたったひとりで終わらされてしまふ。お腹の中の赤ちゃんは、女性の一部であると同じ分、男性の一部でもある。けれど男性は、このように深刻な生か死かという決断に口をはさむことが出来ないでいる。中絶をやめさせることが出来ないだけでなく、それについての意見も言えない。この社会の女性達は、男性が自分の信じていることを声に出そうとすると、彼らをこてんぱんにしてしまふからだ。

私達は女性であるとか男性であるとかいふ前に、まず人間である。そして人間として私達は、この国の何百という中絶クリニックで毎日何千回も行われている、言葉を絶する中絶という行為に反対し、声を上げなければならない。

生きる権利と中絶を選ぶ権利。命は神様からの贈り物だ。お腹の赤ちゃんにチャンスを与えようではないか。チャンスの方がチョイス(選ぶこと)よりもっと大切である。

マイシー・ウォーターガン



ハンディキャップとの付き合い方

幸せを語る母からの手紙

私には、4歳に満たない3人の可愛い子どもがいます。2人めの子どもを身こもって妊娠5ヶ月のとき、その子が脊髄分裂症であると診断されました。医師や遺伝子カウンセラーは、そのような子どもに受けさせる医療行為に伴う精神的・経済的負担は大きく、結婚生活に問題が生じるケースが多いと言いました。私の子どもが経験するであろう治療の苦しみや、生まれることが本人にとってどんなに不幸であるかなどもつぶさに語って聞かされました。いずれは死か、人工呼吸器によってどうにか生きながらえるか、身体



麻痺か、など……。いい例など決して語ってはくれませんでしたが。同じような脊髄分裂症の子どもほとんどが、近代医療の成果で普通の生活を送りながら長く生きることができるようになってきたことは、ずっと後になつてから知りました。医療にたずさわる人が常に最悪のことしか言わないことに、いつも腹がたつ思いでした。神がいなくて、何か悪いことが起こるといつもそれは暗く悲しい運命に終わってしまうようです。

彼らのような人達にかかると、こんな出来事にぶつかったときに「選択肢」なんてないも同然です。担当の産科医の一人は、私のカルテにこんなことを書いていました。「患者に出産の意志あり」とは書かれていなかったのです。こんなことを書かれるようなことを私は何ひとつ言っていないなかつたのに、この言葉は大文字で書かれてさえました。しかも、私達夫婦はこの間ずっと妊娠8ヶ月になつても中絶できる診療所を教え続けられていました。この人達のごときは、今でも腹

立たしく思っています。きっとほかの患者さんにも同じようなことをするに決まっているからです。ある意味では、彼らは異常なまでの自己保身におちいついたとも言えるでしょうが、同時に私をなにも知らない人間であるかのように扱っていただけなのかもしれない。私の意志などこれっぽっちも尊重されず、まるで私の行為が道義に反するかのよう扱われました。

驚くほどの適応能力
過去2年間、パトリックは私達ほかの人間が当たり前にできることを血のにじむような努力で身に付けてきました。寝返り、座る、這う、歩くというようなことに必要な数えきれないほどの技術が教えられました。子どもの成長を普通のことであるかのように見つめることは、これからは決してないでしょう。パトリックは、足に矯正器をつけて上手に歩くことができるようになりました。

抑えきれない愛情
ハンディキャップを持つて生まれてくるとわかつてから、おなかの子どもに対して、言葉では説明しようもない抑えきれないほどの愛情を覚えました。その子が生まれてくることにどれだけ意義があるか、生まれるだけの価値があるかということについて、世間がとやかく言うに違いないことは明らかでした。でも私にしてみれば、迷ったことなどただの一度もありませんでした。女が乳のみ子を、母がふところの子を忘れようか。よし、忘れるものがあっても、私は

忘れない。見よ、私はおまえを手のひらに刻み、おまえの城壁を、いつも私の前に置いた。「イザヤの書 四十九：15、16」。命を産み出すということは、その命を守ることもあるとすぐに気付きました。守らなければならぬ命に対して、愛情がどうしようもないほど深まっていくのは当然のことです。もちろん、その子の将来について不安も懸念もありました。しかし、どんな赤ん坊でも、夜中に眠っている生まれたばかりのその姿を見つめているときに、同じような気持ちを抱かない親はいないのではないのでしょうか。私達夫婦のどちらにも、障害を持つ子どもを愛する能力、育てる特技が特に備わっているわけではありません。

私達はどこにでもいる普通の夫婦で、たまたま普通でない状況の中で暮らしているというだけのことです。子どもを育てるといふ試練は、どんな親にも待ち受けています。子どもが障害者であつてもなくても、その試練は同じものだと私は思います。

2人目のこの子ども、パトリックは生まれて2日目に手術を受けました。腕に抱くことができたのは、出産から3日目でした。それ以来、肝臓の調子が悪かったり手術のため神経外科や整形外科に入院するたびに、パトリックはいつもたくさんの方

がよかれと思うことは同じではないことに気付くべきだと思います。「この私こそが、奇跡と神の恵みのすばらしさを毎日目にしている証人なのですから。パトリックを通じて、神は私に強さを与えてくださり、神の教えにより忠実に、そして神が与えてくれる運命をより受け入れるようにしてくださいました。私達夫婦のつながりは想像以上に強くなりました。愛情は深まり、家族のつながりが強固になりました。かつては当たり前だと思っていたことがらに対しても、今では感謝する毎日です。

クが水たまりに入ったり出たりする様子、大きなトラックを見てかけて杖でその方向を指して「トラックだ！トラックだよ！」と叫ぶ姿などには、何か特別な光のようなものがあるのです。パトリックは自分らしくしているだけで、ほかの人の心の一番いいところを引き出してしまいうようです。パトリックを目にする人達の瞳には、同情の色はありません。幸せいっぱい、自信満々、元気はつらつな男の子を見て可哀想がる人なんているわけがないのです。

それだけではありません。小さな一人の男の子がどれだけ多くの人の心を動かすか、実際にすばらしい経験ができるのですから。パトリックは会う人会う人すべてに、彼独特のやり方で感動を与えているようです。どれだけ感動したか私に伝えてくれる人も中にはいるほどです。パトリックとすれ違っただけで、しかめつづらが温和な表情に変化することもあります。誰でもパトリックには気付かずにはいられないのです。杖で歩く強い意志を持った元氣いっばいのその姿、ほかの小さな冒険者達と同じように自分なりの目的に向かってその姿にみんな目を奪われてしまうでしょう。パトリッ

人は、人間の命を軽く見過ぎていて、その命が私達にもたらしてくれるすばらしい奇跡に気付かないのです。そんな人達は、障害者の人生は悲惨なものだとすぐに簡単に決めつけるものです。医療機関も、そんな典型的な見下した考えをほびこらせる原因を作り出しています。私はよく次の聖書の句を思い出します。「心をあげて神を信頼し、自分の意見に頼るな。(格言 三：5)」おそらく、困難の中で感じる人生のすばらしさをほかの人にわかってもらおうには、もっと声を大にしてこのようなことを言わなければならないのかもしれない。専門家や医師達も、このような証言をたくさん聞けば、困難に突き当たったほかの親達にもいいケースとして説明して

間違っている母へ

プロ・ライフの人が直面する困難の中で最も大きいもの一つに、プロ・チョイスである親戚や愛する人との議論があります。私自身も、つい最近母と交わした電話での会話で、それを体験しました。

私にとって辛いことに、母はプロ・チョイスなのです。神様、彼女をお守り下さい。母の言い分は、間違った情報を信じている多くの人々と同じく、「自分では中絶はしないが、女性の権利として中絶を認める」というものです。数年前にも、私は母と電話で中絶について議論をしました。その時、私は30分もの間奮闘し、中絶の結末はいつも同じで、何の罪もない子どもへの拷問と死であると主張

くれるのかもしれませんが、公平な説明さえしてくれば、親達もよりよい知識に基づいて判断することができるとも思いますが、勇氣と希望を持って暮らしていくことができるかもしれません。命を消してしまうのではなく、命を与えようという気持ちになるかもしれません。誰でも、本当のことを知る権利があるのです。私がこうやって人に話すことができるのも、パトリックのおかげです。

CCfamily 5-6/97p11

張りました。

議論を始めてすぐに、母を納得させるのは難しいことを悟りました。過去何年もの間、母とは意見が一致せず、私たち二人の間には大きな壁が立ちただかっていることを議論をする前から私はひしひしと感じていました。いったん母が意見を固めると、それを改めさせるのは容易なことではないことを私はとつくの昔に知っていたのです。私の主張が正しかろうが間違っているようが母はあなたの負けよ」と言わんばかりの言い方をするので、そのことを知っていたにも関わらず、私は議論を始めた。なぜ私は、報われない努力と知りながらそうしたのでしょ

か。答えは簡単です。私が母を愛しており、誤った情報に惑わされている人々と同じ倫理上の間違いを犯してほしくなかったからです。中絶が誤りであるということ、母に、そしてこの文章を読んでるあなたにも納得してもらうことはできないかも知れませんが、その決断は私ではなく、神のものなのです。

しかし、議論を始めた動機がすべて利他主義とは言えないことも認めなければなりません。母に電話をしたのには、もう一つ目的がありました。私は母から誉められ、励まされなかったのです。生まれる前の子どもたちを守るために私がしてきた努力を誉めてほしかったのです。自分勝手なようですが、この運動に参加

している誰もがそうであるように、私も時には誰かに応援してほしいのです。母と議論して「負ける」とはわかっていても、少なくとも私の努力を母は評価してくれる、そう思ったのです。ところが驚いたことに、母はこのような期待にいつさい応えてくれませんでした。それどころか、私に運動をやめさせようとしたのでした。

親に議論をすることは、失礼に当たるのではないかと考える人もいるでしょう。両親を愛し、尊敬しなければならぬのはもちろんですが、「尊敬」がすなわち「すべてのことに同意することだ」とは思いません。特に、両親の考えが教会の教えに反するものであればなおさらです。私の教会はカトリックですが、中絶は倫理上間違っているということをはっきりと教えています(そのため、中絶をした人、手術を施した人、斡旋した人は、どんな理由があれ、自動的に教会から離脱させられます)。ですが、母と意見が合わないからといって、母を大切にしていけないことにはならないのです。

何事も、意義のあることほど簡単に為し得ないのが世の常です。私たちは、「生きる権利」を信じ、中絶の真実を知る者として、友人や隣人、愛する人、両親も含めた出会った人すべてにその真実を教える義務があるのです。私たちは信念をただ話すだけでなく、行動によって表さなければなりません。自らを「プロ・ライフ」と称しつつ、人々、特に親しい人に信仰のあかしを立てないのは、最も悪質な自己欺瞞です。

ジャック・R・ヴォルツ

家族計画のジレンマ

ジョンとメアリーは結婚したばかりです。彼らは新居を構えて二人で新婚生活を始めたことにうきうきしています。彼らはそのうちに子どもを育てたいと思っていますが、今すぐに始められる経済状態ではありません。二、三年すれば子どもを産む用意ができるだろうと彼らは考えています。

アランとジェーンは結婚して10年になる夫婦で、子どもが二人います。アランは失業したばかりで、ジェーンは幼い娘がいるので家にいます。三人目の子どもを持つゆとりはないと彼は思っています。

マークとミッシェルは結婚して子どもが一人います。ミッシェルは医学的な理由で、少なくとも二年間は妊娠しないほうが良いと医者から言われています。彼らは、いずれはもう一人子どもが欲しいと思っているのですが、今のところは医者の指示に従うつもりです。

三組の夫婦ともカトリック教徒です。こういふ状況でいる彼らにカトリックはどうせよと命ずるのでしょうか？彼らが妊娠せず、しかも罪を犯さないためにはどうすれば良いのでしょうか？産児制限に関して、教会は実際にどう教えているのでしょうか？

この教えを理解するためには、まず誤解を解くことから始めなければなりません。教会は、「家族計画」と名のつくもの全てに反対だと考えている人もいますが、そういう人たちは、教会の教えでは、夫婦は経済的、医学的問題があっても、子どもを産むか禁欲するかのごちらかをしなければならぬと聞いているのです。こうした観点で問題を考えましょう。

彼らは「教会の教えをばかげたものとして片付けてしまうことになりません。」

このことは教会の教えではあ



りません。夫婦には家族計画をする権利と義務があります。このような夫婦が問題を解決し、なお善きカトリック教徒である方法があります。しかし、教会は彼らが家族計画の方法と理由とを理解するよう求めます。「計画」の中には、神の意志に沿うものと、神に逆らい結婚そのものに反するものがあります。私たちが結婚の意味を、次に神の役割を、最後に実際の解決策を考えてみれば、産児制限の問題に光を当てることができます。

結婚の誓約

初めに提起した三つの質問は「結婚した」男女に関するものです。結婚は二人の間で交わされた誓約です。誓約は単なる契約以上のものです。誓約には、二人が自分自身を完全に相手に捧げ合うことが含まれます。結婚はそれが完全である場合にだけ結婚といえるのです。捧げることには、何の疑いも条件も隠し事もありません。配偶者はそれぞれ相手に向かって、「現在もこれからずっと、私の体も魂も全てあなたに捧げます。」と誓うのです。

この考えを表現する肉体的行為が性交なのです。私たちは、頭や心や感情で言おうとすること

を身体を使って表現するのです。何も残しておくことをせず、「全てを捧げるのです。夫と妻が互いに与え合う贈り物の一つは子どもを作る能力で、それはお互いの協力で親になれる比類のない力です。夫が妻に精子を与えるとき、彼自身の「分身を与えているのであり、従って、自分自身を与えていることになるのです。夫は他の誰にも与えないものを妻に与えるのです。性の営みには、この自分の全てを捧げること、新しい生命につながる自分の全てを相手に捧げてしまいうことに、最も深い意味があるのです。」

しかし、この性的な行為から新しい生命を生み出す力が奪われたらどうでしょうか？配偶者に自分自身を捧げたいが、子どもを作る能力は与えたくないとしたらどうでしょう？夫婦は子どもを作る能力を「与えないでおく」ために、(コンドームやペッサリーのような)物理的な方法か、(ピルのような)化学的な方法のいずれかの避妊方法を使うことを許されるのでしょうか？

その答えは、そのような性交の仕方が完全に自分自身を捧げるものかどうかを問いかけてみればはつきりするでしょう。それは明らかに完全に自分自身を捧げるものではありません。なぜなら、何かを捧げずにとって

おく方法がとられたからです。避妊をした性交は大きな疑いを持った性交です。しかし、結婚の誓約は自分を捧げてしまうことを意味します。性交の全ての行為は、結婚の誓約を「新たにするもの」です。肉体的な行為は、夫婦としての生活において行なわれている、自分の全てを捧げていることについての「真実を語る」ものなのです。避妊はこのことに矛盾します。その行為は、一方で「私の全てを捧げます。」と言いながら、実際には「子どもは作りたくない」ということを意味しているのです。従って、夫婦間の性交に避妊薬や避妊具を使うことは決して正しくないのです。

いのちを与える者

「神は誰であるのか？」と尋ねると、別の角度からこの問題を見る事ができます。その質問は避妊とは全く関係がないように思われるかもしれませんが、実際には全てが関係しているのです。

子どもが「欲しい」夫婦から話を始めましょう。子どもができるかできないかを最終的に決めるのは誰でしょうか？神なのです。夫婦にできることは、子どもの妊娠につながりうる性交をすることによって条件を整えること

とだけなのです。神のみが最終決定をします。

子どもの欲しくない夫婦にいても同じことが言えます。夫婦は新しい生命が誕生するかどうかについての最終的な決定者ではありません。神が創造主なのです。親は「共同創造者」なのですが、必ず神と一緒にいて神に従わなければなりません。もし性交の行為をして、それから子どもを作る能力は取り除くならば、夫婦は神を見ながら「あなたには子どもを造らせないぞ。」と言っていることになるのです。彼らは新しい人のいのちの誕生の扉を開かず権利が自分たちにあると思っているのです。こういう理由でローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、避妊という行為を「神を神と認めない」行為だと言っておられるのです。(一九八三年、10月10日発行のオッセルバトール・ロマーノ、p3)それは非常に深刻な問題です。

どうすればその問題を解決できるでしょうか

従って、避妊は必ず間違いなのです。しかしそれでも三組の夫婦に関してははっきりとした結論をいうことはできません。彼らは避妊の手段は使えませ

が、今は妊娠しないための理由があるのです。彼らはどうすればよいのでしょうか。

神は、女性の月経周期がたとえひどく不安定だとしても、いつ排卵が起こるかを夫婦が正確に知ることができるといふ事実において明確な答えを与えています。私たちは、「ここでは、「オギノ式」のことを言っているのではなく、妊娠する可能性のある日を決定するいくつかの顕著な現象に基づいた近代的で改良された方法のことを話しているのです。この方法は、「自然な家族計画」(NFP)の名で呼ばれています。もし夫婦に妊娠を避けなければならぬ重大な客観的理由があるならば、妊娠しそうな期間は禁欲をします。正確に使用すれば、この方法は人工的な方法と同じくらい完全に確実なものです。実際、「自然な家族計画」は、「方法」以上のものなのです。それは性的な自制心、意志疎通、共通の責任、神への服従などの美德に基づいているのです。「自然な家族計画」を守ることによって、夫婦は性的な行為の意味を否めないでいられます。むしろ、家族計画をするために、敬意を持って時々禁欲をするだけなのです。家族計画法を正しく使うことは神の掟やカトリックの教えと一致しています。家族計画の原理と方法は、いろいろ

ベトナムにおける赤ちゃん売買

去る11月の新聞記事によると、ホーチミンのヤミ市場で赤ちゃんの売買が行われている。市の中心部にあるペンタイン市場に4〜7人ほどの妊婦が子どもを売りに来て訪れていると「Dai Doan Ket」新聞の記事にある。性別や、出生証明書類の有無によって215〜1070米ドルと価格に差が出る。ちなみにベトナム人の平均年収は一人当たり約300ドル。

市場で女性に話しかけると、以前は墮ろしていたが、今はお金のために産むと答えた。中には、売るのはこれが初めてじゃないと答えた人もほとんどが売春婦だったという。外国人が養子にと望むため、ベトナムでは子どもの取引が増加している。今年の初め、南部An Giang州の警察は、乳児取引容疑で6人も逮捕した。プロ・ライフ

な場所で行なわれている講習を少し受ければ学ぶことができるのです。

三組の夫婦や彼らのような数多くの夫婦には解決策があるのです。しかし、その解決策を得るには、結婚や愛や新しいいのちを産むことに対する神の計画を尊重しそれに従わなければなりません。教会はすすんで全ての夫婦がそのような正しい方法を

フランシス・ハイウォン

見えるように なった私の目

何年もの間、私は「見えるのに見えていない目と、聞こえるのに聞こえていない耳」を持っていました。そのころ、産科と婦人科の分野で医療のプロとして働いていた私は「盲目」のまま、経口避妊薬を処方したり、子宮内に避妊器具を挿入したり、不妊手術や人工受精を行ったり、中絶病院で働いていました。私は避妊薬や避妊具の使用について助言を与え、避妊の考えを奨励しました。同時に、カトリックの患者の多くが避妊の手段を選んだので、私は首に十字架上のキリストのネットワークスをして、カトリックの患者を快活に熱意をこめて迎えました。ある日、神様の慈悲によって、見えなくなった目が見え、聞こえなかった耳が聞こえたのです。そして、私はイエス・キリストそのものである真実の光に照らして自分自身の姿を見ました。私は気持ちが悪くなりませんでした。私は仕事と宗教が切り離せないものであることを知りました。もし私が看護婦であるならば、私は看護婦とカトリック教徒別々の存在であるのではなく、カトリック教徒の看護婦でなければならぬのです。私はキリストが生きたように生きなければならぬのです。それで私はその仕事を辞め、神の慈悲を信じたのです。ときどき辛いこともありましたが、イエス・キリストは今では私の生活の中心になっています。

性別の選択のための中絶が原因の、中国における男女比の不均衡が悪化しています。人民日報によると、100人の女性に対して男性は120人という割合になっています。シャンハイ・エクスプレス紙によると、中国社会科学アカデミー発表の統計に関する報道記事は、男女比の不均衡の公式的な説明はしていませんが、それは一つには女子より男子を尊ぶ中絶賛成の考え方に原因があると言った匿名の専門家の言葉を引用しています。「この種の不均衡はまた、夫婦一組に対して子どもが一人という家族計画の政策となんらかの関係があることは確実です」とその新聞は報じています。

中国における男女比の差の拡大

外国の団体は、一人っ子政策は、男の子を望む夫婦が女の胎児を中絶したり女の赤ちゃんを殺したりするのを助長していると非難しています。その結果生じる女性の不足が意味することは、非常に多くの男性が結婚できず子どもを持たないということなのです。

一般に、世界の他の国々では、100人の女の子に対して100人の男の子が生まれています。子どもに死ねるのは男の子のほうが多いので、大人になるまでに男女の数は同数になる傾向があります。中国は、人口の増加を強制的に抑えるために、1980年代初期から中絶を奨励する一人っ子政策を推進してきたのです。プロ・ライフ

フランシス・ハイウォン

若者の考え

ビデオ

「沈黙の叫び」

女性の本当の気持ち

私はできればこのビデオを見たくありませんでした。内容は見る前に知っていたし、人間を殺す方法を見る必要はないと思っただけです。ビデオの中で男性の医師が、このビデオは女性が正しい中絶の事実を知るために見て欲しいと言っていたけれど、中絶という方法を詳しく知らなくても中絶が赤ちゃんを殺すということは女性が一番辛く理解していることです。出来れば中絶の方法よりも中絶をしないでいい方法を教えて欲しいというのが女性の気持ちだと思います。

女性は妊娠をした時から自分の中に一つの命があることを知っています。胎児は人間かそうでないかなんて考える必要はないのです。母親にとってお腹の中にあるのは紛れもない一人の人間なのです。それでも経済的、社会的、問題などで仕方なく辛い思いをして中絶をする女性はいまいます。そんな人の中絶をすることはやめるとは私には言えません。男性から見れば知らない子どもを処分してすっきりすると思うかも知れないけれど女性に母性がある限り、中絶をしてすっきりしたと思っただけで女性に母性がある限り、中絶をしたいと思います。男性が子どもを産めない限り、中絶ということについては男性が解決できる事はないと思います。女性は本能の部分で子どもを産みたいという気持ちがあります。それに反する事をすると中絶が女性にとってどんなに辛く重く悲しい事であるのか、社会が考えなければならぬと思います。

男性にはなぜ女性が中絶をするのか、中絶をしないでいい方法はないのか、女性の本当の気持ちをもっと考えて欲しいと思います。中絶は決して良いことではない。しかし中絶する女性が抱えている苦しみは中絶の罪の意識だけではない。世間の目や信じていた子どもの父親の裏切りにも耐えていると思います。子どもを作るといふこと産むということ、その責任と義務を、そして中絶について本当の女性の気持ちを理解している男性が増え女性がそういう男性を選ぶようになります。中絶という問題と共に女性の苦しみが半減する気がします。中絶の事実を知ることが解決につながると思えません。ポリバケツに入った赤ちゃんの映像がいつまでも頭に残って消えません。

Y・Mさん「高三生」

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたが..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない!..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
- [306] ミニソフィアAceエース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [404] いのちーおくりもの....(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる? 天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [410] ビル先進国・英国からの警告...(VHS)...15000 + 郵送料
- [500] (本) 生命問題に関する... (カトリックの教え)...2987 + 郵送料
- [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド)...1000 + 郵送料
- [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
- [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本) 赤ちゃん: 最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
- [512]本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513]本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514]本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本) 経口避妊薬: ピル.....100 + 郵送料
- [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料

独カトリック教会はRU486を認に憤慨

ドイツ・ローマカトリック教会本部は政府が危険な中絶薬(ピル) の国内販売を認可、推進したことを非難している。ヘルムート・コル前首相は、カトリック民主主義の立場から在職中、多年にわたって危険な薬の発売を阻止してきたが、昨年9月の選挙で発足した新政府は、一転して認可の立場をとった。ゲルハルト・シュレーダー現首相は先だって、中絶手術以外の墮胎手段を女性に与えたいとの意志を表明した。その薬を妊娠49日目までに服用すると中絶できるが、危険な後遺症や副作用が予想される。

「この薬さえあれば簡単に済んでいい」と中絶を甘く見るのは許しがたい。独司教連盟代表カール・レーマン氏はラジオ番組でさらにこう語った。「違法な殺人に変わりにない」シュレーダー首相の後押しで、薬の特許を持つエドワード・サクス氏は、独国内での販売許可をEU諸国に申請予定だという。独女性省代表クリスティーン・ベルクマンは、この薬に関して教会と話し合う必要はないと拒絶した。

この危険な は一九八八年にフランスで初めて販売され、ヨーロッパでは現在、他にスウェーデンとイギリスのみで販売が許可されている。

プロ・ライフ

日本---新たな低出生率

日本政府の最近の発表によると、98年の日本での出生率は、これまでで最も低いことがわかった。現在の日本の女性は、その一生の間に平均 人しか子どもを生まないということになる。現在の人口を保つには、一人辺り 人の赤ちゃんを生まなければならぬ。この出産人数以下だと、人口は非常に早いスピードで減っていく。この数字でわかると、日本の終わりに人口が1億2千5百万人から5千5百万人へと、半分以下になってしまふ。これについて報告を載せたザ・ニュー・ヨークタイムズの記事(96年10月6日)では、人々がもっと赤ちゃんを生むよう奨励する方法を探っている。この記事では、4人目以降の赤ちゃんを生んだ母親にお祝い金として5千ドル出すことを挙げている。いくつかの西ヨーロッパ諸国では、そのようなお祝い金を実施しているが、成功はしていない。

ザ・タイムスマガジンは、人口減をストップさせる、最も完全な方法を見落としている。それは中絶による胎児殺害を日本がやめることである。

プロ・ライフ

[511] 赤ちゃん:最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬:ピル

注文:	1 - - - - - 5	1部 = ￥100
	6 - - - - - 20	1部 = ￥75
フルカラー	21 - - - - 99	1部 = ￥50
	1000 - - - 以上	1部 = ￥35

パンフレット申し込は・・・			
1 ~ ~	5	1部 = 35円	
6 ~ ~	100	1部 = 25円	
101 ~ ~	500	1部 = 20円	
500 ~ ~	以上	1部 = 15円	

組み合わせは自由です

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

十代の性

られます。あなたが彼女を愛しているというのは、どういう意味合いからでしょうか？

愛とは何でしょう

質問：近所に知り合って3年以上になる女の子がいます。すごく気が合っている、一緒に出かけることも多いのですが、彼女に好きだと告白すべきでしょうか？

答え：一言で愛と言っても、両親への愛、兄弟(姉妹)や先生、友人への愛など、いろんな種類があることに気づいていきますか？ひとりの人間を愛するにも、幾通りもの形が考え

Q&A

愛には多かれ少なかれ、自分自身を捧げる必要が伴い、時間、エネルギー、支え、励まし、忍耐、思いやり等、挙げればきりがありません。他人のために自分を犠牲にする気持ちを持たなければなりません。つまり愛の本質とは、一種の決断、意志に基づいた行為なのです。心地よい感覚の伴わない行為をする時こそ、真の愛が姿を現わします。結論から言えば、自分の嫌いな人間

を愛し、優しく接することは可能なのです。例えば大嫌いな先生を愛するには、会うたびに元気のいい挨拶と笑顔をかけるよう努めるだけでもいいのです。与えるばかりが愛情表現とは限らないことも、覚えていてほしい大切な事です。子どもが欲しい物を与え続ける親は、その子を自分勝手に社会に適応できない、ダメ人間にする手助けをしているのと同じです。与える行為が愛と呼べるのは、贈り物が相手にとって良い物である時のみなのです。誰をどのように愛するかは、相手と自分の関係にもよります。あなたが男ならば、奥さんへの愛と女友達への愛とは、当然示し方が違うようになるでしょう。結局、相手に最も適した方法で自分自身を与えるのが、望ましい愛情表現といえるのです。上の質問の彼女にあなたが与えられる愛の形も、普通の友達として、「兄弟」のような存在として、恋人としての3つが考えられます。ふたりでよく話し合っ、どの方向に発展させたいかを考えてみるよいでしょう。ただ、関係を発展させていく際に、自分達の年齢や時期的な事も頭に入れておいてほしいものです。

質問：数回しか会っていない男の子から手紙をもらいました。寝ても覚めても私のことを想っているほど好きです、と書いてあります。彼は本当に私を愛しているのでしょうか？

答え：彼はあなたに夢中なようです。男の子が異性に惹かれる時(その逆も同様に)強い衝動が伴います。「愛しい人」として、彼の心にあなたの存在がいつもあり、勉強も手につかない状態なのでしょう。彼はいつもあなたの側にいたいと願い、もし誰か他の男と一緒にだと聞いたら、たまらなく嫉妬するでしょう。ロマンチックな恋心は強く、熱い感情をわきあがらせませんが、本当の愛とは全く別物です。愛とは感情を超えたものなのです。感情はすぐに移り変わります。ふたりの関係が感情に基づく場合、男の子(女の子)は数ヶ月で彼女(彼氏)に飽きて、興味や考えが一致して始まったはずの関係を終わらせたくなるのです。お互いに人間的にさらに成長していく自由は残されたままなのに。男女間のつきあいには、友情、恋人同士のロマンチックな関係、さらには利己的利用

まで、すべてが同時に存在する可能性もあります。問題は、どの要素がどの位の割合で存在するかです。ロマンチックな感情が基本の関係は長続きしないでしょう。ふたりの関係ではふわふわした感情よりも、友情や愛が勝っているかどうかを確かめるにはどうすれば良いでしょうか？それは、その関係をじっくり分析してみることです。まず、あなたはお互いをどこまで本当に知っているといえますか？

腹を割ってつきあえ、お互いの意志や興味を分かち合えるならば、いずれ愛に発展する可能性は高いでしょう。他人を遮断したり、前からの友達との関係を保つため、時々自分だけで友達と会うような、閉鎖的な交際ではありませんか？ロマンチックな感情優先のつきあいは、常にふたりだけでいたい思いが強く、相手が第三者とつきあうのに嫉妬しがちです。一方、愛で結ばれた関係においては、相手が個人的興味を追求し、人間として成長する自由を与えられています。あなたがその関係を発展させていきたいと思つのなら、友情の部分を含め、熱のようには浮かれた感情の部分を減らすべきでしょう。(続く)

デートの心得

(貞潔について)

「まず第一に、私の信条として結婚するまでセックスはとっておきたい。未来の夫と私の間の素晴らしい特別な行為にしたいから。彼に私と他の誰かと比べて欲しくないし、私も彼のことを比べたくない。そして何より、結婚前のセックスが諸々の結末を引き起こすのだから」

(NOと言つには)

「セックスを避け続けるにはまず、誘惑が起こりそうな状況、例えば男(女)友達と一人だけで会ったり、セックスをけしかける友達とのつきあいを避ける。結婚まで性関係は持たない意志を周囲に伝え、巻き込まれないようにするといふ」

「NOと言つたための最善策は、今すぐにでも自分自身の中に境界線を引き、その範囲内で交際すると相手に告げることだ。決意は固く守り、妥協は厳禁!」

「セックスを断つたら彼にふら

れてしまうのではないか心配している友達がいたら、それは真の恋じゃない、そんな男はふつた方がいいと言つてあげたい。決意や望みを打ち明けても理解してくれないのは、ふたりの関係を真剣に考えていない、ただの身勝手野郎なのだから」

(慎みをもつて)

「露出度の高い服を着ていると、周囲に注目されやすい。実際は自分に自信がなくて少しでも周りにアピールしたいがための服装かもしれないが、男性の目には、物欲しそうな、すぐやらせてくれそうな女に写る!」

(結婚について)

「私が結婚相手に望むことは次の4つである。」

- 1 ユーモアのセンス
- 2 誠実で信頼できる人柄
- 3 利己的ではなく他人を思いやれる
- 4 精神的な強さ

アマンド・ロシェル・ベニックス

19歳